

## 2019年コンペティションⅡ 総評

今年のコンペティションⅡは、既存のコンテンポラリーダンスを自分なりにどう捉えて作品をつくるか？または踊るか？という問いの中で生まれた作品と、意識的か無意識的かは別として、既存のコンテンポラリーダンスからどのように逸脱していくか？をテーマにした作品があったように思う。無意識的かも？としたのは、そのことが現在のコンテンポラリーダンス界を象徴しているようにも思えたからである。最優秀新人賞を受賞した大森瑤子もその一人だ。

そもそも「コンテンポラリーダンス」としてカテゴライズすることすら、なんかもうどうでもよいように思えるほど、圧倒的にそこに人が存在しており、何か表現しようとしている「様」が美しかったし、面白かったし、楽しかった。

「結局、人じゃない？」みたいな身も蓋もない話になってしまったが、近年はその大事な部分が抜けてしまっていたように思うのだ。

作家からの一方的な視点で語るとすれば、ダンスは「非具象である意識（想い）を肉体を使って具象化し、その表現をliveで観客に伝える」ものだ。そのためにテクニックは必要だが、多くのダンスはカタチやテクニックに捉われすぎてバランスが悪い。そもそも作品に携わる各人の「意識（想い）」を作家がもっともっと大事にすべきだし、観客や周りからも尊重されるべきだ。作家と観客の「意識（想い）」が立体的なやり取りをして初めて次のステップへ進める。この先、そのような作品やダンサーに出会えることを私は期待する。

伊藤千枝子

今年は突出した特異な作品が本選では見当たらなかった。

審査は二段階。まずは全応募作品の映像・書類審査があり、そこで通過した12組が本選に選出される。当然1次審査は映像から判断するわけだが、それは映像以上でも以下でもない。本選で映像からの印象を大きく裏切られることも多々ある。良い意味で映像とはまったく異なるものを表現して欲しい。

ひとりの人間の中には、道徳やルールといった社会規範を無意識に理解しているエゴ（自我）という面があり、一方人間の持つ本能的な欲望に属しているイドという水面下に属する面がある。その両面の調整役としてスーパーエゴ（超自我）というものが存在すると言われている。

常識や予め決められたコレオグラフィーを舞台上で全うしようとする超自我があまりにも強く、本能から発する欲望であるイドの意識が薄い。要するに固有の肉体や精神、経験などから生まれる表現、「どうしてもこれを表現したい」とする気概をもっと見たい。コンペティションⅡは小慣れた作品やテクニカルな作品ではなく、常識以前のどうしようもない己の肉体や精神に飼っているリビドーを評価する。

ヴィヴィアン佐藤

去年はファイナリスト全員が「のげシャーレ」のブラックボックスに初めて対面し戸惑いを隠せない様子だったが、今年はそれぞれがさまざまな工夫でこの空間に立ち向かっている姿が見られたことがうれしかった。

最優秀新人賞の大森瑤子『三角コーナーに星がふる』は、何より大森の切れ味のよい踊りがチャーミングで、その動きから生まれる肌合いが人を惹きつける。選曲も面白い。来年の新作発表が楽しみだ。直球のメッセージを真摯にダンスに落とし込んだ神田初音ファレル『社会の窓』、奇妙な味わいを見せた横山八枝子『silence』も印象的。青柳万智子『うたかた』は作品としてはまだ荒削りだが、彼女の身体との対話は魅力的で、今後に期待を抱かせる。

今回もコンテンポラリーダンスの定型に従って、綺麗に、無難に作品をまとめようとする傾向が全体的に強いように見受けられた。破綻を恐れずに、自分の身体の声に従って突き進んでいくような作品をもっと見たいとも思う。

浜野文雄

横浜ダンスコレクションの審査員を務めて3年になります。初年から講評で述べ続けていることは、ダンスのためのダンスでは弱い、ということです。そして、ダンサーのためのダンスも弱い。いつの、どこの、なにへ、向けた、ダンスか。それを考え抜いてダンスを作品にして欲しい。そう言い続けてきました。本年度の上演はどれも劇場に合った、観客を意識した、作品になっていたように感じます。また、どなたも振付家としての技量があると感じました。しかし、なぜか、物足りない。初年から作品を求め続けたはずなのに、ひとりの観客として、興奮が起こらない。その矛盾について深く考えました。劇場に合っている作品は、劇場に収まっているのと同義なのかもしれない。過不足のない振付とダンサーは、互いを閉じ込めあっているだけなのかもしれない。僕がダンスで見ていたのは、作品の中で、決められた振付と目の前のダンサーの拮抗であり、破綻と収束の往復であり、もはや単純に身体が持っている気迫、なのかもしれない。本年度は、あらためてダンスと作品について考えさせられました。大森瑤子さんは振付を作品にする冷静な構築力と、いまここにある身体を解放させるダンサーとしての破壊力を、バランスよく兼ね備えていたと感じます。振付家として、そして、振付を破壊し再構築する優れたダンサーとして、評価したいと思います。

柴 幸男